

公益財団法人

西原育英文化事業団

Impact Report

2024

私たちの
「これまで」と「これから」



Summer Camp 2023 西粟倉村にて

私たち、公益財団法人西原育英文化事業団(Nishihara Cultural Foundation : NCF) は、1966 (昭和41) 年5月、財団法人西原育英文化事業団として設立され、2011 (平成23) 年に公益財団法人へ移行した、奨学金事業・助成事業を主たる事業とする団体です。今回のImpact Report発表に際して、私たちの取り組みの「これまで」と「これから」について少しお話ししておきたいと思います。

1966年の「財団法人西原育英文化事業団 設立趣意書」^[1]には、設立発起人の一人であった西原脩三^[2]が、奨学金の提供、アジア・日本の学生のための交歓・研修の場の提供を強く願い、それが財団設立の目的となったことが述べられています。つまり、奨学金事業は私たちにとって最も重要な、そして基本的な事業であるといえます。その開始は、1967 (昭和42) 年。まず経済的に困窮した有為の学生支援を目的としてスタートしましたが、当初から衛生工学、環境工学等を専攻する学生を対象とした「特別生」という枠を設定しており、環境問題研究への支援も意識しておりました。この「特別生」は「特別奨学金」をへて、2006 (平成18) 年、「西原・環境奨学金」として再編成され、その対象範囲をそれまでの理工学系統から、人文科学系統にまで拡大し、環境問題についてのさまざまな専攻・専門をもった高専専攻科学生^[3]、大学学部学生・大学院生を対象とした奨学金となりました (具体的にどんな専攻・専門をもった奨学生がいらっしゃるかはNCFのHPで紹介しています)。こうした対象の拡大は、私たちの、「環境問題は技術論的知見のみによって解決しうるものではなく、さまざまな分野による横断的総合的な取り組みを必要とする」という考え方によるものです。NCFのもう一つの事業、助成事業でも、環境に係るさまざまな講座・講演会・ワークショップ等への助成をおこなっておりますが、これらもこうした考え方に沿ったものです。

また、私たちは1984 (昭和59) 年以来、奨学生の合宿を実施してきました。当初は「夏季研修会」というやや硬い名称の集まりでしたが、やがてOBOGも参加できる緩やかなものへと進化し、名称も「Summer

Camp」へと変わりました。このSummer Campは、さまざまな専門や専攻をもった奨学生・OBOGが、夏の数日をただ一緒にすごすだけのイベントではありませんが、これまでさまざまな出会い、発見、きっかけを生み出し、現在では私たちの事業の柱の一つとなっています。現在取り組んでいる「さまざまな環境問題研究のための人と人をつなぐプラットフォーム」も、その出発点はこのSummer Campにあります。さらにいうなら、このSummer Campは、1966年の「設立趣意書」にあるアジア・日本の学生のための交歓、研修の場の提供^[4]という西原脩三の願いの延長線上にある取り組みであるとも考えています。

今回の事業振り返りでは、さまざまな問題点の発見があった一方で、私たちの取り組む事業が、大筋では1966年の「設立趣意書」の趣旨や、西原脩三の願いに沿ったものであったこと、少なくともそれを大きく逸脱したものではなかったことが確認でき、その点では安心することができました。そして、それとは別にもう一つの大きな気づきがありました。それは、私たちにとっての強み・財産は「OBOGの皆さんをはじめとするさまざまな人的コネクション(繋がり)」であるということです。この皆さんとのコネクション(繋がり)については、私たちにとっては(少し傲慢なのですが)ごく当たり前ようになってしまい、それほど意識していなかったのです。が、今回の事業振り返りによって、実はたいへんに大きな強み・財産であることに気づくことができました。

私たちの今後の課題は言うまでもなく、NCFの取り組みをどのようにアップデートしてゆくか、どのように同時代的な要求に応じてゆくかということです。具体的な内容についてはこれからですが、その方向性については、おぼろげながら見えてきました。それは、私たちの強み・財産を積極的に活用させていただく、



Summer Camp 2023にて

ということです。もちろんそのために、私たちが行なってゆかなければならないこともたくさんあります。例えば、取り組みの成果や情報の発信は大きな課題だといえます。「知っていただく」という取り組みは、たいへんに重要だと思っています。そして、それらに加えて、いささか勝手ではありますが、OBOGをはじめとするNCFにかかわる皆さんに、ご助力いただけたら、ご参加いただけたら、たいへんにうれしいと考えています。このことは、これまで漠然と考えていたことではあるのですが、今回の取り組みを経て、かなりはっきりと自覚するようになりました。これは、皆さんへのご協力、ご助力のお願いですが、同時に「ご参加へのお誘い」でもあります。60年ほど前に西原脩三が思っていたこと、そして私たちNCFが取り組んできたこと、そこに、できることなら、今皆さんが考えておられること、想っておられることを併せて、これからの取り組みを考えてゆきたいと思っています。

どうか、私たちNCFを今後もよろしく願いいたします。

公益財団法人西原育英文化事業団
代表理事 西原彰一

[1] 設立趣意書の全文はNCFのHPで見ることができます。

[2] 日本における汚水処理のバイオニアの一人。株式会社西原衛生工業所、株式会社西原環境衛生研究所(現株式会社西原環境)創業者。1883(明治16)年～1965(昭和40)年。

[3] 西原・環境奨学金の高等専門学校専攻科学生への対象拡大は2015(平成27)年から。

[4] 財団法人西原育英文化事業団は「いするの家」(International Students Resort Homeの頭文字I、S、Rの(ちょっと強引な)ローマ字読みが「いする」の由来です)という施設を中軽井沢・千ヶ滝において運営しておりました。その後、閉鎖、再建、また運営母体の変更等はありませんでしたが運営は続けられ、長らくSummer Campの会場としても親しまれてきました。しかし老朽化等のため、2019年(令和元年)12月をもって借しまれながら閉館いたしました。

西原・環境奨学金

Nishihara Scholarship for Environmental Studies

1966年より奨学金事業を開始しました。2006年より西原・環境奨学金の形となり、環境問題について広い範囲のさまざまな専攻・専門をもった学生を対象とした奨学金を貸与しています。

2006年度～2023年度の実績

貸与人数

42人

貸与総額

107,953,290円

対象分野

1. 地表の表層に関する分野

2. 気候変動に関する分野



3. 社会・経済活動に関する分野



4. 大気・水・土壌等に関する分野



5. 災害に関する分野



6. 化学物質のヒトの健康への影響に関する分野



7. 生物多様性に関する分野



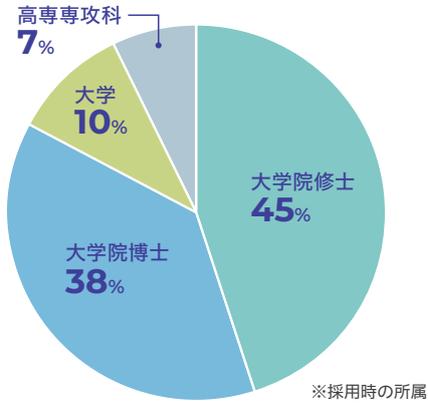
8. ゴミやリサイクルに関する分野



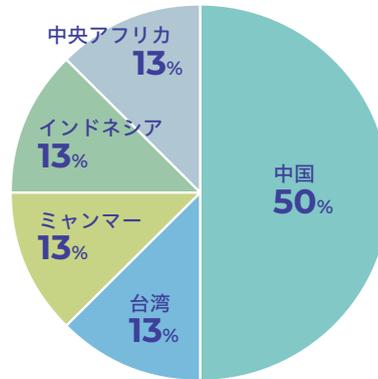
各分野の詳細については、HPをご参照ください。

奨学生の属性

所属



留学生



所属

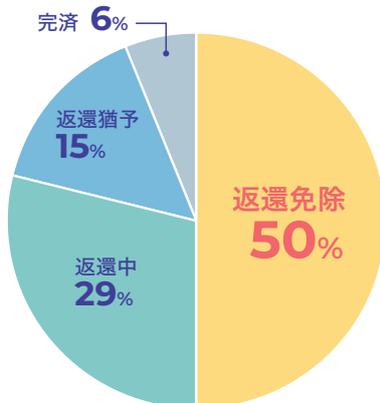
大学院修士・博士所属が83%を占める。

留学生

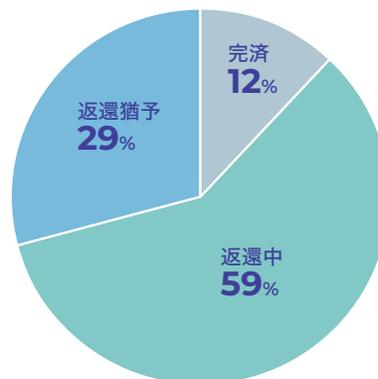
奨学生のうち、留学生の割合は19%。特別奨学金では5%だったところから、大きく増えている。

返還状況

全奨学生



免除者を除く



全奨学生

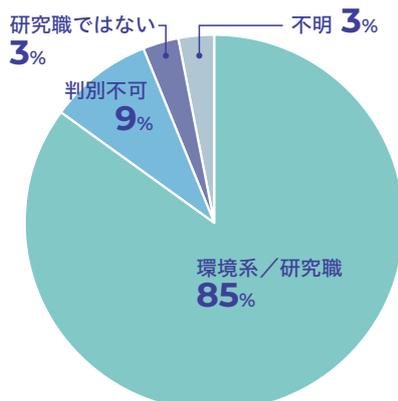
奨学生の50%が返還免除対象と、免除の割合が高いことが伺える。

(特別奨学金では返還免除率が24%だったところから上がっている。)

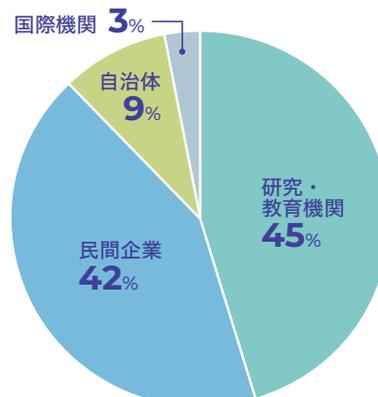
※西原・環境奨学金には特定の事由による返還猶予、返還免除についての規定があります。詳細はHPに掲載の奨学規程をご確認ください。

卒業後の進路

環境系・研究職



属性



属性

奨学生の大半が環境系あるいは研究職に就いている。特別奨学金と比較しても就職先の形態に大きな差はないが、西原・環境奨学金の方が、研究・教育機関に進む奨学生の割合が多い。

西原・環境奨学金インタビュー

Nishihara Scholarship for Environmental Studies Interview

実際に奨学金を活用していたOBOGや、
学生に奨学金を紹介して下さった先生方にインタビューをしました。

OBOG



台湾国立中興大学
環境工学専攻 助教授

チェンミンシェン 氏

— NCFにどんなイメージを抱いていますか？

西原・環境奨学金がなかったら、学業に打ち込めなかったと思います。
博士課程の1年生かつ外国人という、ポテンシャルがわからない状態だった私を信じて奨学金を出していただいて感謝しています。信じてくれている・信頼してくれているということが当時の自分にとってはとても大きかったです。

— 印象に残っていることはありますか？

奨学金だけでなく、財団や西原さんがサポートしてくれたこともありがたかったです。
西原さんは「お金以外のことで困ったら相談してね」と声をかけてくれて、何か困ったら相談できる居場所を作ってくれていると感じていました。
今は先生の立場になって、自分が西原さんに声をかけてもらったように、学生に対して「いつでも相談してね」と言うようにしています。

— NCFにどんなイメージを抱いていますか？

西原・環境奨学金は、面接で人の将来性を見て「伸びる可能性がある人」をサポートしてくれる奨学金です。学生時代は西原さんに就職相談にも乗ってもらい、自分が就職を考えている分野の人を繋いでもらいました。

— 卒業された現在の、NCFとの関わりについて教えてください

Summer Campには今でも毎年参加しています。分野が違ったりといろんな方がいるので楽しいです。
普段接することのないような人と接することができて人間関係の輪が広がったり、困ったときに相談したりできて、とてもリフレッシュになっています。



広島県庁
惣中英章 氏

先生方



呉工業高等専門学校
環境都市工学分野 教授

重松尚久 氏

— NCFにどんなイメージを抱いていますか？

お金以上に、面倒を見てもらえる奨学金財団だと思います。ただお金をもらって終わりではなく、コミュニティが組めていることが特徴だと思います。
Summer Campに参加した生徒で、進路について悩んでいる中でOBに相談し、研究者になるか就職するかで迷って就職に決めた生徒もいました。学生にとってはしがらみがない方に相談できるいい機会だと思います。

— どんな学生におすすめしていますか？

Summer Campなど、コミュニティに入っていくのが好きな人がいいと思います。
反面、「良い学生を送らないといけない！」と思うので、なかなか数が紹介しづらいところもありますね。



東京大学大学院工学系研究科
都市工学専攻都市環境工学講座
教授

片山浩之 氏

— NCFにどんなイメージを抱いていますか？

奨学金以外に Summer Campのような交流の場など、お金を渡しておしまいのやり方ではないのがいいですね。

また、財団自体が、社会に向けた知名度をあげればいいんだ！というエゴがない印象です。しっかりと学生にとって有益になるようにお金を使っている財団だと思います。

— どんな学生におすすめしていますか？

交流がしっかりある奨学金コミュニティなので、交流が好きな人か、交流が苦手だと自覚しており改善したい人にお勧めしています。交流が苦手と自覚している人の中には、安心してコミュニケーションできるところにしかいけない人も多いので、安心して喋れるなら喋りたいという人にはお勧めしています。

西原さんは奨学生とのコミュニケーションを大事にされていて、西原さん自身も楽しんでいるのが伝わってくるので、そういった学生にとっても安心して喋れる場になっていると思います。

— NCFにどんなイメージを抱いていますか？

自分自身も元奨学生で、自分にとってものすごくありがたかったです。元々サラリーマンをしていて、大学院に戻るために他の奨学金もいただいていましたが、それでも金銭的に厳しかったんです。

その時にNCF奨学金をもらったことが、自分にとってすごく大きかったです。

— どんな学生におすすめしていますか？

奨学金のコンセプトは、世の中に対して知的好奇心がある人に向けたものなのかなと感じています。自分の専門分野だけに閉じず、色々なことに興味を持つ人というイメージです。

Summer Campで西原さんや奨学生・OBOGと夜な夜な話す際も、色々なことに対して興味をもって、聞いているだけじゃなくて自分がどういうことを考えているか、それに対してどう思うという事がはっきり言える学生が多い印象です。

なので、そういった面でカルチャーが合いそうな人におすすめしています。例えば、文系、理系を超えて自分の研究の話ができる人や、お互いの話を興味深く聞ける人です。

また、教養ややる気、将来に対するビジョンもある人の方が合うかなと思っています。一方で、学業成績が必ずしもよくないといけない、ということもないと思っています。



芝浦工業大学建築学部
建築環境工学研究室 教授

西村直也 氏

助成金事業

Grant Program

2015年より助成金事業を開始しました。社会有用の人材の育成に寄与することを目的に、青年学生に対する講演会、研究会、講座、講習会の促進に関する助成援助を行っています。

2015年度～2024年度の実績

助成総額

33,000,000円

実施年度	助成活動名	実施団体	助成金額(円)	年度総額(円)
2024	8th Food and Environmental Virology Conference (第8回食品・環境ウイルス学会)	東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻	2,000,000	9,500,000
	「人新世におけるグローバル環境学」(ワークショップ、講演会、特任研究員雇用を含む)	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	5,000,000	
	水環境と防災に関する一般公開講座	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,500,000	
	東南アジア水環境国際シンポジウムの開催	東京大学大学院工学系研究科附属水環境工学研究センター	1,000,000	
2023	次世代アジア都市環境創生リーダー育成プログラム	東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻	1,000,000	7,500,000
	「人新世におけるグローバル環境学」(ワークショップ、講演会、特任研究員雇用を含む)	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	5,000,000	
	水環境と防災に関する一般公開講座	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,500,000	
2022	水環境と防災に関する一般公開講座	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,500,000	3,000,000
	「マクロコスモスとミクロコスモスの環境学」(ワークショップ、講演会)	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	1,500,000	
2020	水環境と防災に関する一般公開講座	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,500,000	1,500,000
2019	水環境と防災に関する一般公開講座	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,500,000	3,500,000
	Japan-YWP 10周年記念イベントにおけるワークショップ	Japan National Young Water Professionals	1,000,000	
	「アジア・ドゥルーズ／ガタリ研究国際会議第7回2019年東京大会」	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	1,000,000	
2018	「先進的な流域マネジメントーカリフォルニア統合水資源管理ー」ワークショップ	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,000,000	3,000,000
	第11回IWA世界会議「ポストSDGs：未来ビジョンの必要性」ワークショップ	Japan National Young Water Professionals	1,000,000	
	シンポジウム「水のシンポジウムー日本・アジアを循環する水の文化誌ー」	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	1,000,000	
2017	米国統合水環境管理に関する講演会	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,000,000	3,000,000
	「水の思想」講演会	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター(UTCP)	1,000,000	
	「2030年SDGs Goal6の達成に向けて」国際セミナー助成	Japan National Young Water Professionals	1,000,000	
2016	米国統合水環境管理に関する講演会	信州大学工学部水環境・土木工学科	1,000,000	1,000,000
2015	シンポジウム「上下水処理における「温故知新」」	Japan National Young Water Professionals	1,000,000	1,000,000

助成金インタビュー



信州大学工学部
水環境・土木工学科 教授

吉谷純一 氏

— 助成プロジェクトについて教えてください

信州大学でカリフォルニア水計画に関するシンポジウムを開催したのをきっかけに、年8回程度の連続講演会開催の助成を受けるようになりました。当初は信州大学外から講師を招いた授業を公開する形で始まりましたが、一般の参加者は少数でした。令和元年の東日本台風災害の後に千曲川水害に関する講演会を開催したところ、地元の関係者が多く参加するようになりました。コロナ禍にはウェビナー配信を導入し、今では全国各地から、ときには海外からも、300人以上の方に参加いただいています。

— 講演会では、参加者にどんなことを伝えたいと考えていますか？

特定分野の狭いテーマを扱うのではなく、課題の全体像を伝えることを重要視しています。複雑な課題を解決するには、課題の全体像の理解が必要だからです。例えば、災害時は避難情報が出ていても逃げ遅れが発生します。原因は、知識不足、心理的な面、逃げられない事情があるなど様々です。ひとつの原因だけに着目し、実行可能な解決策のみを実施しても、自己満足に過ぎず課題解決に近づくことすらできません。まずは、全体像の把握を最初にすべきです。多くの方にこれを理解してほしいと考えています。

— NCF助成金への印象を教えてください

ほとんど制約がない助成金なので助かっています。研究開発の助成金、特定分野を指定する学術研究集会支援の助成金は多くありますが、一般向けのテーマを自由に選定できる講演会開催ができる助成金はなかなか他にはありません。

— 助成プロジェクトについて教えてください

UTCPは共生のための国際哲学研究センターです。論文執筆だけでなく、研究員がそれぞれテーマを決めてイベントの企画・運営を行うことを大事にしています。研究者ごとに得意分野は様々ですが、特にその中でも環境問題や自然との共生に関わるテーマについて、NCFから助成をいただいています。といっても分野をクロスするテーマも多く、例えば水俣病などは環境問題でもあり、人・社会に関する問題でもあります。

— プロジェクトを通じて目指していることは何ですか？

UTCPの研究員に対しては、自分で企画しネットワークを作り、外の人に名前を知ってもらいたいです。協力者を見つけ、交渉し、イベントを成立させるという一連の流れが今後研究者としてキャリアを築いていく上で大事なことからです。実際、研究員の就職率も高いので、そういった経験やスキルが評価されているのではないかと思います。協力者やイベント参加者と繋がるのが、センターの活動の広がりにも寄与すると思っています。実際、イベントに繰り返し参加するうちに協力関係になった学生や研究者、団体の方も多くいます。研究協力者としてスタッフと共同でイベントを運営してくれている方もいます。

— NCFの特徴や印象を教えてください

一つは、プロジェクトの柔軟性です。資金使途やイベント内容などに細かな制約がないので、やりたい活動ができています。

また、西原さんの学問に興味を持っている姿勢が嬉しいです。お金の支援だけで終わらない関係ですね。人と人プラットフォームのキックオフイベントをご一緒しましたが、今後もNCFの活動にもっと関わっていきたいと思っています。



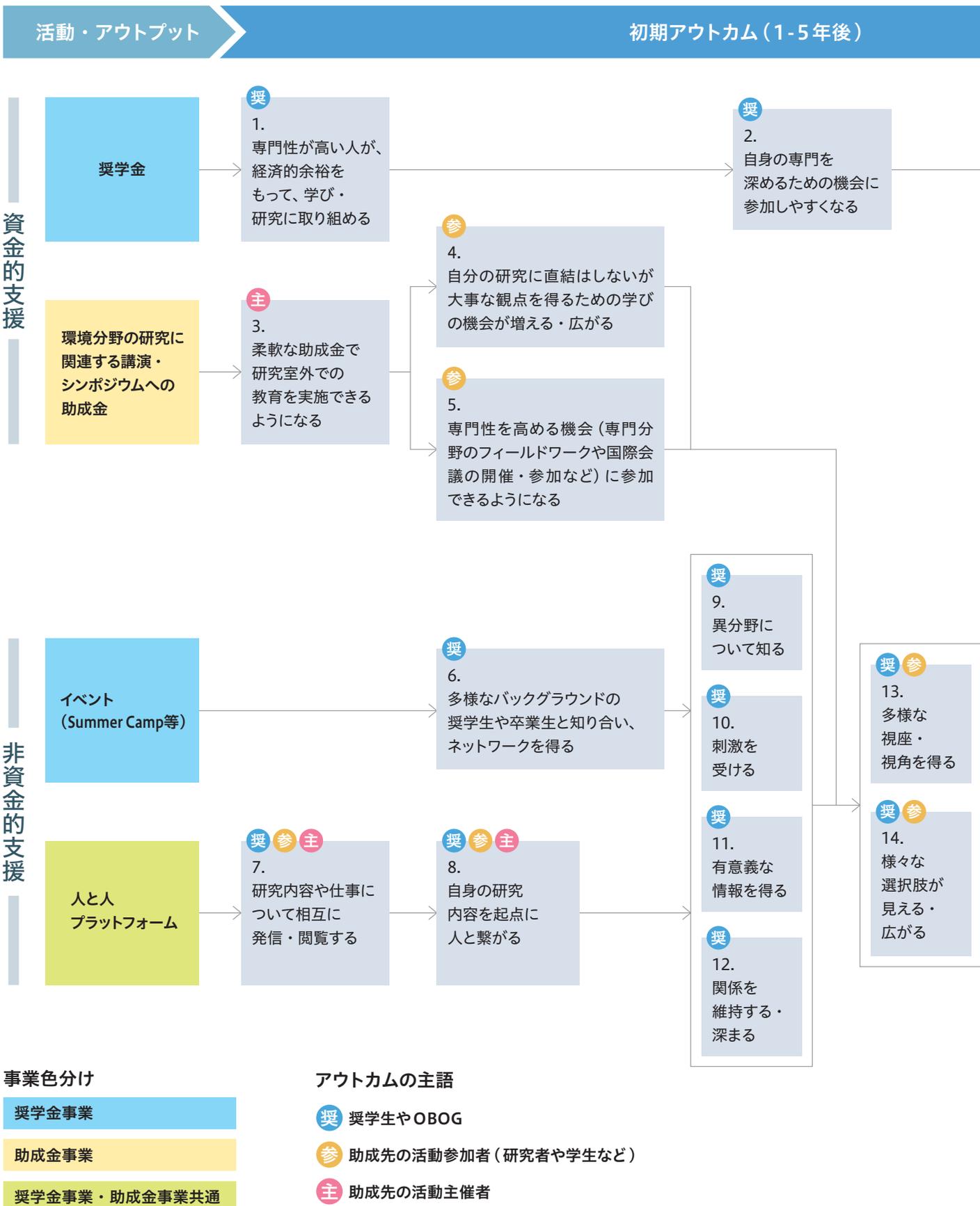
東京大学
大学院総合文化研究科 教授

梶谷真司 氏

ロジックモデル

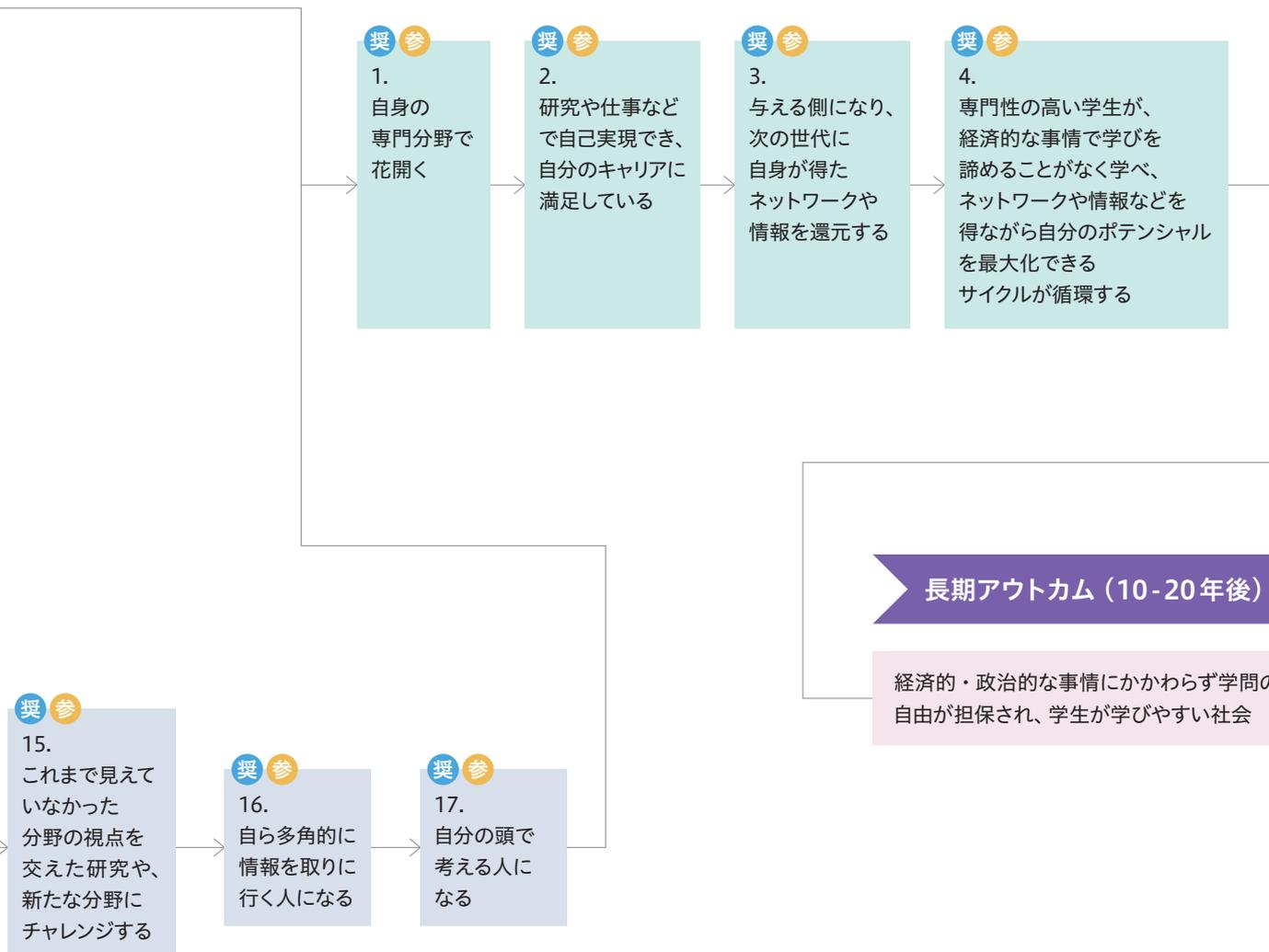
Logic Model

ロジックモデルとは、事業がどのような道筋で目的を達成しようとしているのかの仮説や戦略を示したものです。事業内容にあたる「活動・アウトプット」を通じて、生み出すことを目的としている変化である「アウトカム」の実現に向けた道筋を体系的に図示化しました。



ロジックモデルを公開することで、NCFがどのような道筋で目指す社会に向かって活動を行っているのかを共有し、皆さんと一緒に実現していきたいと考えています。

中期アウトカム（5-10年後）



「イベント (Summer Camp等)」について

「イベント (Summer Camp等)」は西原・環境奨学金の現役奨学生やOBOGに対して提供しているオンライン・オフラインの交流機会を指します。現在は、年1回開催のSummer Campに加えオンラインで交流できるイベント等を実施しています。今後もより活性化させていく予定です。

「人と人プラットフォーム」について

「さまざまな環境問題研究のための人と人をつなぐプラットフォーム」(略称:「人と人プラットフォーム」)は西原・環境奨学金の現役奨学生・OBOGをはじめ、環境分野の研究・教育に取り組む様々な人をつなげるためのプラットフォームです。このプラットフォームは、毎年夏に対面で行ってきたSummer Campのような交流の場をオンライン上でも作ることを目指します。

奨学金事業アンケート結果

Scholarship Program Survey Results

西原・環境奨学金を受け取った現役奨学生とOBOGに対して、ロジックモデルのアウトカムを計測するためのアンケート調査を実施しました。

活動・アウトプット

初期アウトカム（1-5年後）

資金的支援

奨学金

1. 専門性が高い人が、経済的余裕をもって、学び・研究に取り組める

質問1a. 西原・環境奨学金を受けてから研究にあてられる時間が増えた。

- ・全体：90% (19人 / 21人)
- ・OBOG：85% (11人 / 13人)
- ・現役生：100% (8人 / 8人)

質問1b. 西原・環境奨学金を受けてからこれまでやっていた研究と関係のないバイトを減らせた。

- ・全体：79% (15人 / 19人)
- ・OBOG：77% (10人 / 13人)
- ・現役生：83% (5人 / 6人)

質問14a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、これまで想定していなかった進路の選択肢も新たに一度は検討した。

- ・全体：29% (6人 / 21人)
- ・OBOG：31% (4人 / 13人)
- ・現役生：25% (2人 / 8人)

質問14b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、これまで気づかなかった進路の選択肢が存在していることに新たに気が付いた。

- ・全体：48% (10人 / 21人)
- ・OBOG：54% (7人 / 13人)
- ・現役生：38% (3人 / 8人)

非資金的支援

イベント
(Summer Camp等)

6. 多様なバックグラウンドの奨学生や卒業生と知り合い、ネットワークを得る

9. 異分野について知る

10. 刺激を受ける

11. 有意義な情報を得る

13. 多様な視座・視角を得る

人と人
プラットフォーム

7. 研究内容や仕事について相互に発信・閲覧する

8. 自身の研究内容を起点に人と繋がる

12. 関係を維持する・深まる

14. 様々な選択肢が見える・広がる

質問13a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、自身の研究に繋がるヒントを得た。

- ・全体：57% (12人 / 21人)
- ・OBOG：62% (8人 / 13人)
- ・現役生：50% (4人 / 8人)

質問13b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、研究職以外の職業経験のある人と交流があった。

- ・全体：52% (11人 / 21人)
- ・OBOG：54% (7人 / 13人)
- ・現役生：50% (4人 / 8人)

質問13c. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、今まで自分とは専門が異なると思っていた分野の研究者と意見交換をした。

- ・全体：62% (13人 / 21人)
- ・OBOG：69% (9人 / 13人)
- ・現役生：50% (4人 / 8人)

各白ボックスの中の数値は、肯定的な回答をした人（「とても当てはまる」「当てはまる」を選択した人）の割合。

中期アウトカム（5-10年後）

2. 自身の専門を深めるための機会に参加しやすくなる

質問2a. OBOGの方へ：ご自身の現在のお仕事の内容に満足している。

・OBOG：77%（10人／13人）

質問2b. OBOGの方へ：ご自身の現在の給与・待遇（福利厚生・研究環境・研究費等）に満足している。

・OBOG：62%（8人／13人）

1. 自身の専門分野で花開く

2. 研究や仕事などで自己実現でき、自分のキャリアに満足している

3. 与える側になり、次の世代に自身が得たネットワークや情報を還元する

4. 専門性の高い学生が、経済的な事情で学びを諦めることがなく学べ、ネットワークや情報などを得ながら自分のポテンシャルを最大化できるサイクルが循環する

15. これまで見ていなかった分野の視点を交えた研究や、新たな分野にチャレンジする

16. 自ら多角的に情報を取りに行く人になる

17. 自分の頭で考える人になる

質問3a. 西原・環境奨学生コミュニティに対して自身が得たネットワークや情報、自身の時間を提供している・していた。

肯定的な回答をした人（とても当てはまる、あるいは、当てはまるを選択した人）の割合

・全体：14%（3人／21人）

・OBOG：15%（2人／13人）

・現役生：13%（1人／8人）

質問3b. 後輩・次世代（西原・環境奨学金以外）に自身が得たネットワークや情報、自身の時間を提供している・していた。

・全体：29%（6人／21人）

・OBOG：31%（4人／13人）

・現役生：25%（2人／8人）

質問15a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、新たな研究テーマに取り組んだ。

・全体：24%（5人／21人）

・OBOG：23%（3人／13人）

・現役生：25%（2人／8人）

質問15b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、自身の研究に今まで考えていなかったような視点を加えた。

・全体：43%（9人／21人）

・OBOG：46%（6人／13人）

・現役生：38%（3人／8人）

現役奨学生8人、OBOG13人の合計21人に回答いただきました（OBOG13人のうち研究者が6人、非研究者が7人）。ロジックモデルの黄色枠部分のアウトカムに対して、それぞれ複数の質問を設定し、アンケート調査を行いました。

本ページでは各アウトカムごとの質問とその回答結果を示し、次ページ以降で、各質問の回答とその分析の詳細を示しています。

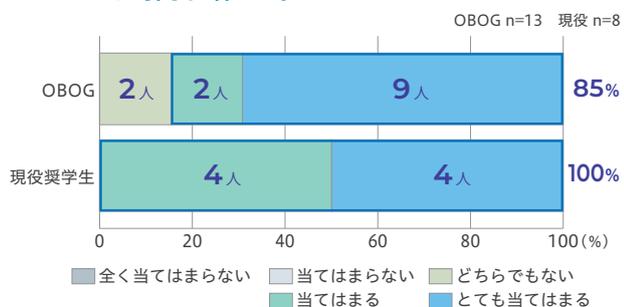
回答者を現役生とOBOGに分けたうえで結果を集計しましたが、サンプルサイズが小さい（現役生：n=8、OBOG：n=13）ことから、両グループの差について統計的検定は行いませんでした。

奨学金事業アンケート結果

初期アウトカム

1. 専門性が高い人が、経済的余裕をもって、学び・研究に取り組める

質問1a. 西原・環境奨学金を受けてから研究にあてられる時間が増えた。



現在の奨学生の全員が、西原・環境奨学金を受けたことで研究時間が増えたと回答。

質問1b. 西原・環境奨学金を受けてからこれまでやってきた研究と関係のないバイトを減らせた。



奨学生の多くが、西原・環境奨学金を受けたことで研究と関係のないバイトを減らせたと回答。

総評 西原・環境奨学金は奨学生が研究にあてる時間を増やすのに効果があると言える。

初期アウトカム

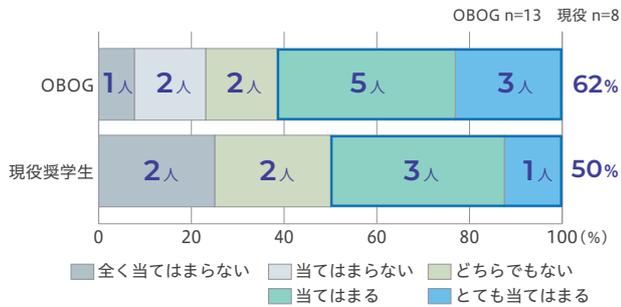
6. 多様なバックグラウンドの奨学生や卒業生と知り合い、ネットワークを得る

質問6. NCFで知り合った方々と、具体的にどのような関係性がうまれたか教えてください。

- 「西原・環境奨学金の奨学生であることが会話のきっかけとなり、仲良くなりやすかったと思います」
- 「交流イベントに招待頂けた(しかし日程が合わず、まだ参加できてない)」
- 「事務局が開催したイベントによって元々接点がない方々に会え、お話ができることで自分の見識がとても広がりました」
- 「①以前、就職関係で来学された方が事務局の塚原様と同期の方で、その方とは初対面だったが、とても和やかな雰囲気でお話をさせていただいた。②仕事先で、OB/OGなど関係者とお話する機会がある」
- 「関係性構築とまではいっていないが、ヒヤリングを通じてコミュニケーションを図る程度」
- 「研究分野が近い方と学会などで会った時に話すようになった」

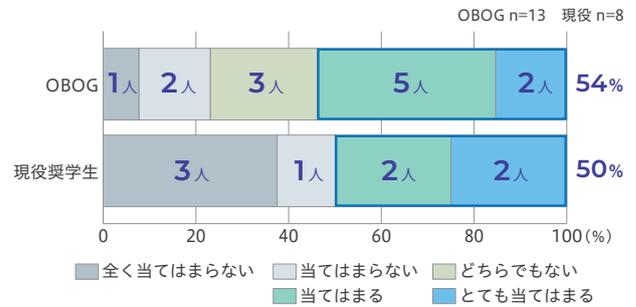
13. 多様な視座・視角を得る

質問13a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、自身の研究に繋がるヒントを得た。



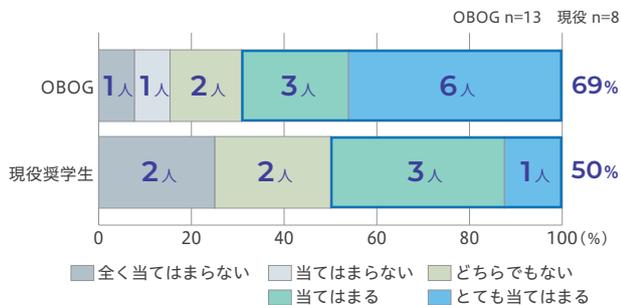
特にOBOGからより肯定的な意見がでた。NCFに長くかかわることで、自分の専門外の人たちと意見交換をする機会が増える可能性がある。またOBOGのうち研究職についている方は6人中全員肯定的な回答をした一方で、研究職以外の方の肯定的な意見は約4割にとどまった。研究職につく人ほど、自身の研究に対する新たなヒントを得られている。

質問13b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、研究職以外の職業経験のある人と交流があった。



全体として約半数の奨学生・OBOGが、NCFを通じて研究職以外の職業経験のある人と交流があったとした。現役生はイベントに参加する機会がまだ少なく、また、特にオンラインイベントで他の参加者の属性が分からず交流に至っていなかった可能性がある。OBOGからより肯定的な意見がでたことから、NCFに長く関わることで、自分の専門外の人たちと意見交換をする機会が増えるといえる。

質問13c. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、今まで自分とは専門が異なっていた分野の研究者と意見交換をした。



特にOBOGを中心に、NCFでのイベントが自分たちと専門が異なると思っていた分野の研究者と意見交換をした人が多い。NCFに長くかかわることで、自分の専門外の人たちと意見交換をする機会が増える可能性がある。

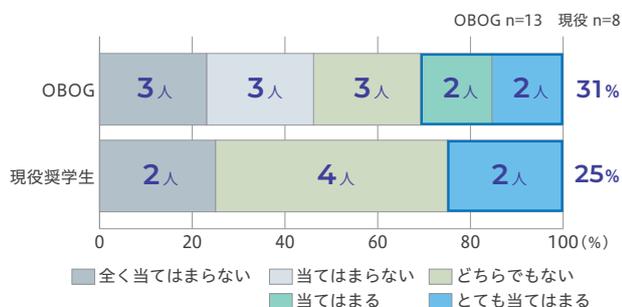
総評 NCFのイベント・その他の機会は、奨学生が多様な視座・広い視角を得るのに一定の効果がある。

奨学金事業アンケート結果

初期アウトカム

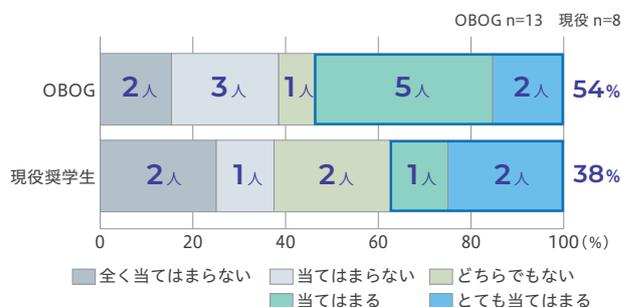
14. 様々な選択肢が見える・広がる

質問 14a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、これまで想定していなかった進路の選択肢も新たに一度は検討した。



NCFのイベント・その他の機会を通じて、約3割の人たちが自身の将来の新たな選択肢を検討する機会に繋がった。3割という結果にとどまった背景には、NCFの奨学生の多くが、研究職につくという強いキャリアプランをすでにもっていたことが理由として考えられる一方で、そのような奨学生の3人に1人が新たな進路の選択肢を一度は検討したという結果は注目に値すると考える。

質問 14b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、これまで気づけなかった進路の選択肢が存在していることに新たに気が付いた。



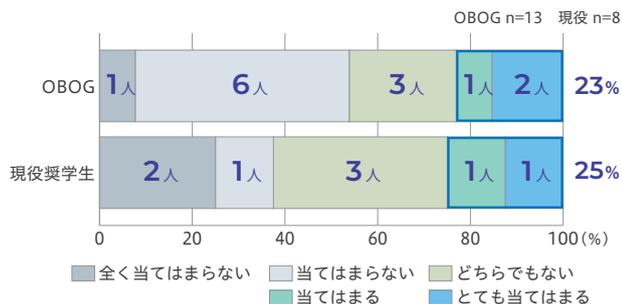
NCFのイベント・その他の機会を通じて、全体の約半数の人たちが、これまで気づいていなかった進路の選択肢に気が付いた。研究者になるという明確なキャリアプランをもっている学生が集まる中で、約半数に対して、新たな進路の選択肢をもたらしたことは意義があると考えられる。特にこの傾向はOBOGに強く、NCFに関わる機会が長いほど、その傾向が強まると言える。

総評 NCFのイベント・その他の機会は、奨学生が様々な選択肢を見たり、広げるのに一定の効果がある。

初期アウトカム

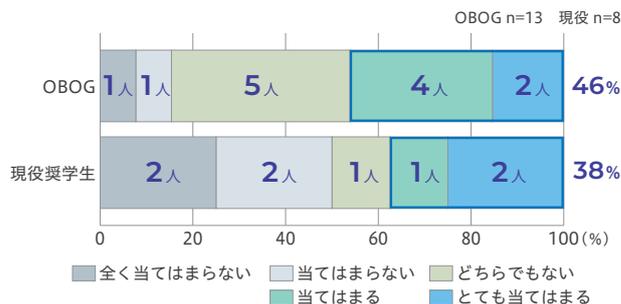
15. これまで見えていなかった分野の視点を交えた研究や、新たな分野にチャレンジする

質問 15a. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、新たな研究テーマに取り組んだ。



NCFのイベント・その他の機会を通じて、新たな研究テーマに取り組んだ人は全体の1/4に留まる。しかし一般に、ある程度研究の方向性を定めた人が新たなテーマに取り組むはそう容易ではないことを考慮すると、NCF 奨学金は受給者が新しいことに取り組むことを促進するのに一定の効果があることが示唆される。

質問 15b. 西原・環境奨学金のイベントやその他の機会を通じて、自身の研究に今まで考えていなかったような視点を加えた。



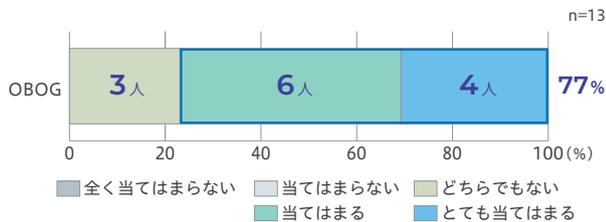
NCFのイベント・その他の機会を通じて、全体の約半数の人たちが、これまで気づいていなかった進路の選択肢に気が付いた。特にこの傾向はOBOGに強く、NCFに関わる機会が長いほど、その傾向が強まると言える。また、OBOGの中では研究者の方が顕著に肯定的な回答をしていることから、研究者は専門分野以外のことに触れる機会が少ない傾向があるのではないかと推測される。

総評 NCFのイベントやその他の機会は、奨学生がこれまで見えていなかった分野の視点を交えた研究や、新たな分野にチャレンジするのに一定の効果がある。

中期アウトカム

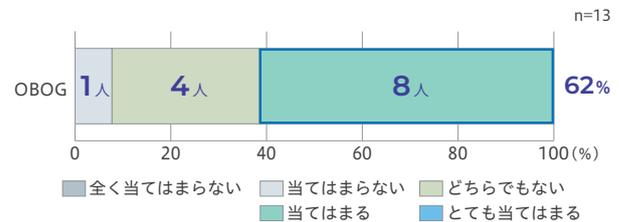
2. 研究や仕事などで自己実現でき、自分のキャリアに満足している

質問2a. OBOGの方へ：ご自身の現在のお仕事の内容に満足している。



NCFのOBOGの約8割は現在の仕事の内容に満足している。

質問2b. OBOGの方へ：ご自身の現在の給与・待遇(福利厚生・研究環境・研究費等)に満足している。



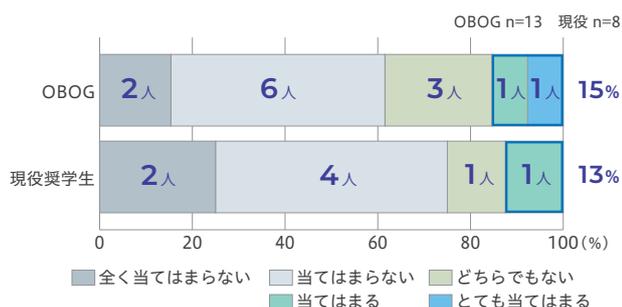
約8割が現在の仕事の内容に満足している一方で、給与・待遇に満足している人は約6割に留まった。今回、回答者の多くが30代であり、若手の研究職のポジションが限られており、終身在職権を得るまでに不安定な経済状況を余儀なくされる年齢層であることを踏まえると、数年後の調査では雇用状況の安定化に伴い肯定的な意見の回答者が増える可能性もある。

総評 自身の仕事への満足度・仕事の待遇の満足度に関して、今日の若手研究者を取り巻く状況を考慮すると、総じて良い結果であると考えられる。特に待遇は自身で選ぶにくいという状況の中で、約6割が満足しているという回答となったのは、低くない結果だと考える。

中期アウトカム

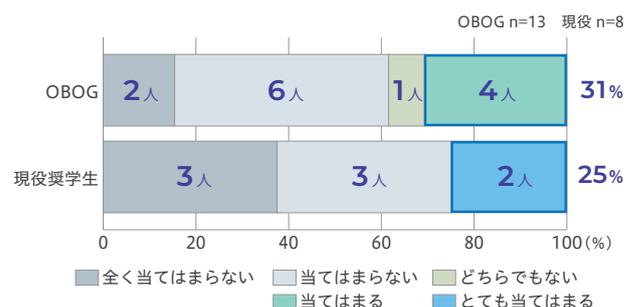
3. 与える側になり、次の世代に自身が得たネットワークや情報を還元する

質問3a. 西原・環境奨学生コミュニティに対して自身が得たネットワークや情報、自身の時間を提供している・していた。



NCF奨学生コミュニティに対して自身のネットワークや情報・時間を提供している人は14%に留まる。今回はアンケートの設問において、「ネットワーク」とは何かを定義しなかったことから、控えめな回答に留まった可能性がある。

質問3b. 後輩・次世代(西原・環境奨学生コミュニティ外)に自身が得たネットワークや情報、自身の時間を提供している・していた。



NCF奨学生コミュニティ外に対して自身のネットワークや情報・時間を提供している人は、約3割。

質問3c. 具体的に提供したもの

- 「後輩に博士課程進学やそれに関する金銭援助(西原・環境奨学金以外)の情報を教え、進学を進めるようにしている」
- 「国際ジャーナルや国際会議に関する情報やノウハウ」
- 「同級生に西原・環境奨学金の募集について教えた」
- 「大学で博士人材向けの講演、講義など継続的に実施」
- 「自分の進路選択などの情報」

総評 次世代に貢献しようと思っても実際に行動におとすには時間がかかる。回答者のほとんどは若手(30-40代)の研究者で、一般的には自分の研究に没頭している年代であるにもかかわらず、次世代のことを意識して行動している人が実際にいることが確認された。

助成金事業アンケート結果

Grant Program Survey Results

助成金を受け取ったプロジェクトに対して、ロジックモデルのアウトカムを計測するためのアンケート調査を実施しました。過去の助成プロジェクトのうち、3名の方に回答いただきました。

回答者 } ・ 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 / 東京大学大学院工学系研究科 附属水環境工学研究センター
} ・ 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター (UTCP)
} ・ 信州大学工学部水環境・土木工学科

初期アウトカム

3. 柔軟な助成金で研究室外での教育を実施できるようになる

質問3a: 当助成金の金額は十分でしたか。

とてもそう思う 2人 / そう思う 1人

質問3b: 当助成金の使い道、使い方について制約を感じましたか。

全くそう思わない 2人 / そう思わない 1人

質問3c: 質問(3b)の回答の理由や、当助成金を受けることによってプロジェクトの内容や方法に変更しなければならないことが生じた場合は詳細を教えてください。

- ・ 助成期間(期限)がなければベスト。
- ・ 広い意味での環境に関わるテーマのために予算を使わせていただくことにしていますが、とくに用途に関して制限を課されていないので、不自由を感じたことはなく、とてもありがたく思っています。

質問3d: 当助成金によって対外的な活動(学会・シンポジウム・イベント等の主催)の機会が増えましたか。

とてもそう思う 3人

質問3e: 質問(3d)の回答について、具体的な内容を教えてください。

- ・ 一般公開、参加費無料とすることができ多くの方が参加できるようになった。
- ・ ワークショップと出張イベントでは、様々な登壇者や参加者をつながりができ、またセンターのメンバーどうしの協力、連帯感を強めるいい機会にもなっています。
- ・ 国際会議の招致やフィールド演習の実施を積極的に検討できるようになった。

質問3f: 当助成金によって対外的な活動(学会・シンポジウム・イベント等の主催)の質が向上しましたか。

とてもそう思う 3人

質問3g: 質問(3f)の回答について、具体的な内容を教えてください。

- ・ 各分野トップクラスの方を講師に呼ぶことができた。
- ・ 講演会やシンポジウムのような、登壇者・主催者からの一方的な発信(双方向なのは質疑応答くらい)ではなく、イベントの最中に主催者、登壇者、参加者が一緒に何かをしたり交流する時間が多いので、お互いに刺激を受ける面が多いです。また、そうすることで参加者と新たなコラボレーションが生まれることもあります。今の言葉で言えば、とてもインクルーシブな場を作ることができていて、新しいタイプの研究活動になっていると思います。
- ・ 学会会場と鉄道駅のシャトルバスサービスなど、参加者の利便性が大きく向上した。

総評 これらの回答から、初期アウトカム3「柔軟な助成金で研究室外での教育を実施できるようになる」は達成できたと考えられる。

初期アウトカム

4. 自分の研究に直結はしないが大変な観点を得るための学びの機会が増える・広がる

質問4: 当助成金を使用した活動を通して、その参加者がこれまでと異なる考え方を知ることができたと思いますか。

とてもそう思う 1人 / そう思う 1人 / どちらでもない 1人

総評 これらの回答から、初期アウトカム4「自分の研究に直結はしないが大変な観点を得るための学びの機会が増える・広がる」は、一定程度達成できたと考えられる。

初期アウトカム

5. 専門性を高める機会（専門分野のフィールドワークや国際会議の開催・参加など）に参加できるようになる

質問5a：当助成金を使用した活動において、その参加者は専門性を高めるための機会を得ることができたと思いますか。

とてもそう思う 2人 / そう思う 1人

質問5b：質問(5a)の回答の根拠や具体的なエピソードを教えてください。

- ・各分野トップクラスの講師と親密になれた。
- ・研究員が各自でイベントを企画・運営をしていて、そのさい自分の専門研究を広げることが推奨されています。そのため、ももとの専門と関連する活動をする人もいれば、まったく新しいテーマに取り組む人もいて、それを続けているうちに新しい専門分野ができていきます。また、当センターでは、それぞれが自分のテーマでイベントを企画・運営しつつ、お互いのイベントをするさいに協力し合うようにしているので、それを通して自分の知見を広げることができていて、そのことがまた翻って自分の専門性を豊かにすることにもつながっています。その協力者には、参加者が含まれていることもあり、その人が研究者である場合には、同じように知見を広めることにつながっているのではないかと思います。
- ・国際会議において、送迎バスなど、参加者とコミュニケーションをはかる場が増えた。

質問5c：当助成金を使用した活動を通して、その参加者が、論文、研究発表の成果を挙げることができたと思いますか。

とてもそう思う 1人 / そう思う 1人 / 全くそう思わない 1人

質問5d：質問(5c)の回答の根拠や具体的なエピソードを教えてください。

- ・幅広い内容の講演会で見識を広める目的なので、研究深化に直結しない。
- ・当センターでは、すべてのイベントに関して、ブログ報告を書き、HPで公開するようにしています。学術的な論文とは違いますが、みんな専門的な知見も踏まえながら、自由な考察と議論をしています。HPはとても多くの人たちに閲覧されており、またそれぞれのイベント情報やブログ報告を、互いにSNSでシェアするようにしているので、学術論文よりもはるかに多くの人に届いていると思います。外部の人や学生の企画でイベントをすることもあり、その場合は、その人にブログを書いてもらっていて、その点でも、メンバーと同様に、その人の活動の発信にもなっています。

総評 これらの回答から、初期アウトカム5「専門性を高める機会（専門分野のフィールドワークや国際会議の開催・参加など）に参加できるようになる」は、達成できたと考えられる。（質問5cで「全くそう思わない」を選択した回答者も、見識を広めるといふ点では、専門性を高める機会になったと回答している）

初期アウトカム

13. 多様な視座・視角を得る

質問13a：当助成金を使用した活動を通して、その参加者にこれまでと異なる立場の人たちとの関わりが生まれた、または増えたと思いますか。

とてもそう思う 3人

質問13b：当助成金を使用した活動を通して、その参加者が自身の研究に寄与するヒントや新たな発想を得たと思いますか。

とてもそう思う 2人 / そう思う 1人

質問13c：当助成金を使用した活動を通して、その参加者の視座・視角が広がったと思われる具体的なエピソードがあれば、教えてください。

- ・分野ごとに設計思想や業界の体制が異なることが理解できていたはず。
- ・ワークショップの最中やイベント終了後に参加者と話す時間がかなり長いので、その話の中でそのようなことを直接聞く機会がある。
- ・環境問題に対する捉え方が日本国内と海外では異なっていることを、学生交流の中で実感したなど。

総評 これらの回答から、初期アウトカム13「多様な視座・視角を得る」は、達成できたと考えられる。

助成金事業 アンケート 全体への 考察

- ・計測できた初期アウトカムについては、概ね達成できているといえる状況。
- ・近年注目されているインクルーシブな場作りが実現されていることが見て取れる。
- ・様々な形で専門性を高める活動が実施されていることが見て取れる。
- ・そうした場における様々な活動を通じて、多様な視座・視角を得ることに繋がっていると思われる。
- ・回答者の方が非常に具体的・積極的に回答いただいていることから、この助成金が回答者にとって役に立ったことが窺い知れる。

公益財団法人

西原育英文化事業団

〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号

Tel 03-3456-0707

Fax 03-5730-6852

URL <http://www.nishihara-cf.org>



HPはこちら